

未来へつなぐ祭りと思い

市内の歴史や逸話を題材に、市民が創り上げる登米市民劇場「夢フェスタ水の里」(登米市、登米市教育委員会、(公財)登米文化振興財団主催、夢フェスタ実行委員会主管)。
18回目を迎える夢舞台は3月5、6の両日、登米祝祭劇場で開催された。実行委員を含む総参加者は315人。そのうち、約120人が出演者として舞台を彩り、約1700人の観客が魅了された。



夢フェスタ水の里 心の絆で山車を曳け～登米秋まつり異聞～

本気は壁を超える

「登米の秋まつり」は町民の心のよりどころ。祭りまでの1カ月は、老いも若きも誰もが夢中になる。これだけの祭りでも、存続が不安視されている。祭りを愛する有志らは「少子高齢化社会での伝統文化、コミュニティの継承」をテーマに台本を書き上げた。

「年に2回も秋まつりができるなんてうれしいね」と参加者たちは口をそろえた。山車は舞台上に上げるだけの予定だった。しかし、過去最多の参加者の協力で、劇中での祭り再現となった。多くの町民の力と思いを注がれた公演は、過去最多の観客を動員し、感動的なフィナーレを迎えた。「本気は壁を超えられる」登米の皆さんが、大事なことを教えてくれた。

あらすじ

登米市登米町にある老舗旅館の跡取り、葛西朝彦と大崎政江は好意を寄せ合っていた。だが、ともに伴侶を迎える立場に悩んでいた。

2人は340年の伝統を持つ登米秋まつりが好きだった。けれども、手間のかかる祭りに懐疑を抱く若い衆が出始めた。囃子を担う子供も減った。それを憂えた指導者の徳治が祭りや山車の発祥を語り始めた。
元禄2(1689)年の梅雨、登米伊達家5代当主の村直は、隣接する浦合伊達家や津田家とのわだかまりに悩んでいた。ふた昔前の伊達騒動が原因だった。そんな折、江戸から来た俳諧師が仙台祭りの山鉾を話題にしたことを知った。

登米秋まつりは14年前、村直が抱癒快癒の御礼に始めた。その祭りに山鉾のような山車を加えれば「暗雲を一掃できる」。それを聞いた母藤子の方は「当家と関わり深い京の雅を取り入れて」と懇願した。それを機に若い衆が緋爛な山車造りに取り掛かった……

1 フィナーレでは、お囃子の演奏とともに、舞台奥から山車が登場。その前で、囃子方、踊り手が秋まつりを再現。館内は割れんばかりの拍手に包まれた
2 感動のラストシーン。祭りの存続方法の中に、自分たちの結婚のヒントを見つけた朝彦と政江。2人は将来の仲を誓い手を取り合う
3 本番前の舞台裏。役者をメイクするスタッフ。裏で支える人がいるからこそ、舞台は成立する
4 古臭い祭りなど、面倒くさくてやっつけられないという若い衆に、徳治は「お前らの先祖が始めた山車巡行を潰そうとしている」と声を荒らげる
5 抜群の掛け合いで、舞台を盛り上げる脇役たち。主役が輝けるのは、脇役の名演があつてこそ
6 迫真の演技を見せる子どもたち。年齢性別を問わず、みんなで創り上げるのが夢フェスタ
7 祭り存続に向けての方向性が合わない朝彦と4人の若い衆。また、朝彦と政江の仲をうらやむ良平は、たまたま朝彦に殴りかかる

関係者に聴く



制作部長兼
指導者「徳治」を演じた
後藤 十九二さん
登米町遠見台



小学校の学習発表会でも、劇をしたことがない全くの素人。せりふが少ない役なので、何とかなるだろうと引き受けました。考えが甘かったですね。稽古が始まると、せりふを覚えるだけでも精いっぱい。そこに演技をしなければならなかったのです。本当に大変でした。しかし「感動した」「秋まつりを見たい」という声をかけられ、引き受けてよかったなと思いました。全ての支えてくれた人たちに感謝しています。

演出兼
「松尾芭蕉」を演じた
衣川 城二さん
登米町遠見台



私は大学卒業後、演劇の世界に飛び込み、一昨年末まで東京で活動していました。そういった縁で、声をかけていただきました。入場料を貰って劇を見せる以上、お客さんには満足してもらわなければなりません。必然的に稽古は厳しくなりましたが、みんなよく付いてきてくれました。ほぼ全員が素人で、あれだけの内容にできたのですから、皆さんの努力は大したものなのです。今後も、夢フェスタに関わりたいと思います。

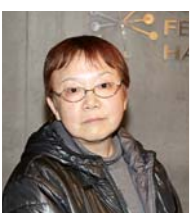
浅野正義さん
迫町大網西



今回知り合いが出演していたこと、演劇が好きなので見に来ました。タイトルにあるように、秋まつりを成功、継承させようとする若い人たちの心の絆が素晴らしいかったです。

観客に聴く

木戸浦まち子さん
迫町駒木袋



H@!FMや広報とめで知りました。登米町に住んでいたことがあるので、登米秋まつりは知っていました。会場全体を使った演出は、出演者と観客が一体となり、とても良かったです。